



火砕流で焼失した森を再生させるため
苗木を植える高校生ら

雲仙・普賢岳火砕流30年 森再生へ今年も植樹 高校生ら80人参加

1991年6月の雲仙・普賢岳の大火砕流から今年で30年になるのを前に、噴火災害で緑が失われた古里に森を再生させる植樹活動が7日、島原市南千本木町の砂防えん堤内であった。島原半島の高校生ら約80人が参加し、クヌギやツバキなどの苗木約500本を植えた。

千本木地区は噴火災害で全住民が立ち退きを強いられ、火砕流に

見舞われた跡地に土石流被害を防ぐ砂防えん堤が整備された。植樹は1999年、造園業者らでつくる市民団体「雲仙百年の森づくりの会」が、半島内の10高校に参加を呼びかけ、開始。毎年2月、就活や受験を済ませ進路を決めた3年生が植樹して来たが、今年はコロナ禍のため少人数で実施した。

県立島原農高を卒業した石田梨乃さん(18)は「卒業記念の植樹がなくて残念だったが、今日は部活動の後輩たちと一緒に参加できた」と笑顔を見せた。

【近藤聡司】